

果樹編 第5巻 イチジク (基本技術編—整枝・剪定) 技 57～58ページ

III 品種のタイプと整枝・剪定

[執筆者] 栗村光男 (福岡県農業総合試験場豊前分場)

[執筆年]

1991年

[見出し]

1. 榊井ドーフィン . . . [1]

- (1) 品種の特性
- (2) 整枝
- (3) 剪定

2. 蓬萊柿

- (1) 品種の特性
- (2) 整枝 . . . [2]
- (3) 剪定

3. 夏果専用種

[図表] [] 内はページ表示中の該当ページ

第1図 蓬萊柿の開心形 (2本主枝) . . . [2]

キーワード：暫定亜主枝\主枝\亜主枝

III 品種のタイプと整枝・剪定

1. 榊井ドーフィン

(1) 品種の特性

夏果と秋果を両方生産できる兼用種である。夏果は140g程度で秋果に比べるとかなり大きくなるが、収量が秋果の1割程度しかなく、成熟期が7月上中旬の梅雨期にあたるため、果実の腐敗が多く生産が安定しない。なお、すべての結果母枝を切返し剪定する一文字などの整枝法の場合は、必然的に夏果の生産はできなくなる。

秋果は収穫期が8月中旬～11月上旬と長期にわたり、90g程度の大きさに10a当たり収

量は2～3tと高い。秋果の着果はきわめて容易で、前年生枝（結果母枝）の各節から発生する新梢がほとんど結果枝になる。多少徒長ぎみの枝にもよく着果するので、結果母枝を1～2芽で切り返して（この場合、夏果はつかない）、一文字やX字形にすることによって、低樹高栽培が可能である。また水田転換園や施設栽培にもよく適応し、近年栽培面積が増加している。

（2）整枝

樹勢は中位で開張性で、秋果の着果が容易なため強剪定が可能で、一文字、X字形、杯状形および開心形などさまざまな整枝法が各地で行なわれている。しかし近年、水田転換園や施設栽培の導入にともない、整枝が容易で、低樹高のため管理労力が軽減できる一文字整枝が多くなっている。

（3）剪定

徒長ぎみに伸びる新梢にもよく着果するので、幼木時からの強い切返しができる。樹形構成時に結果母枝を切り返すさいは、充実した部分（枝の茶褐色の部分）を残すようにする。結果母枝を長く残しすぎると、発生する新梢の伸びが悪く、結果母枝上の新梢の大きさが揃わなくなる。樹形の完成後は、結果枝の間隔を考慮して結果母枝を適当に間引き、残した結果母枝は1～2芽で切返し剪定を行なう。

主枝に障害（病虫害、生理障害、寒害など）があり、新梢の生長が悪くなった場合などは、主幹部や主枝基部から発生する新梢を利用して主枝を更新することが可能である。また芽の方向により、発生する新梢の生育状況が著しく異なるため、切り返す位置の芽（潜芽）の方向に注意する。

2. 蓬 = 柿

（1）品種の特性

夏果は着生しても通常5月中旬以降大部分の果実が生理落果するが、ジベレリン処理により落果を防止し収穫することができる。夏果は、100g程度で7月中下旬に成熟するため、梅雨明け以降に収穫するものは腐敗もなく商品価値は高い。

秋果は8月下旬～10月下旬まで収穫され、柗井ドーフィンと比較すると収穫開始は遅れるが、収穫終わりはやや早い。

果実は70～80gで柗井ドーフィンより扁平になり、10a当たり収量は2.0～2.5tである。過熟になると果頂部が裂開しやすく、商品価値が低下するので、収穫適期を逸しないようにすることが大切である。

充実した結果母枝の頂芽から発生した新梢は良好な結果枝となり、秋果の着果が多く、果実が大きく、熟期が早く、品質も良好で、生産の主力になる。一方、強い切返しにより発生する新梢は徒長し、果実の着果が悪く小玉で、熟期が遅れ、品質が不良になる。したがって間引き剪定を主体として樹冠を拡大し、樹勢が早く落ちつくような整枝法や栽培法が適する。

（2）整枝

樹勢がきわめて強く、直立性であるため、栽植距離を広くとり（8×8m～10×10m）、樹冠を拡大し開心形に仕立てる。

樹形構成時に強剪定を行なうと、樹勢が強くなりすぎて新梢が徒長し、初期収量が上がらない。幼木時から剪定程度を軽く、間引き剪定を主体とし、枝を積極的に誘引し、低樹高化を図る。若木の間は暫定垂主枝を数本配置し、樹勢を早く落ちつけて、初期収量を高める。

開心形の場合、植付け1年目は、60～70cmで切り返し、主枝は2～3本とる。各主枝に垂主枝を2～3本配置する。第1垂主枝は主枝分岐部より1.5～2.0m離し、主枝との均衡を保つようにする。整枝はおおよそ5～6年で完成するが、主枝の高さは収穫する人間の身長の高さに誘引して維持し、主枝の先端はやや上げる。樹形完成後も結果母枝や結果枝を積極的に誘引し、樹勢を制御し樹冠内の日当たりをよくすると同時に、結果部を一定の高さに維持し収穫労力の軽減を図る（第1図）。

(3) 剪定

樹勢が強く、強剪定により徒長枝が発生するので、間引き剪定を主体とする。若木ときの剪定は極力軽くし、結果母枝数をできるだけ多く確保し初期収量を高める。

樹形完成後は結実部位が先端に移行しないように、予備枝（切戻し候補の枝）を育成する。盛果期以降になり、新梢の伸びが悪くなった場合は、適宜結果母枝の切返しを行わない樹勢を維持する。

良好な結果枝は30～40cmの長さで、8月中には伸長が停止するものである。結果枝は結果母枝の大きなものには2～3本、中庸なものには1～2本、弱小なものには1本になるように芽かきする。したがって10a当たり適正な結果母枝数は2,500～3,000本で、結果枝数は5,000～6,000本である。

3. 夏果専用種

サンペドロ型に属するビオレ・ドーフィンやサンペドロ・ホワイトなどの夏果専用種は、節間が短くよく充実した結果母枝の先端部数節に着果する。切返し剪定を行なった結果母枝には夏果が着生しないので、開心形に仕立て、間引き剪定により充実した結果母枝を多く残して生産性を高める。

樹形構成時には結果母枝を充実した部位で切り返し、水平に誘引し、新梢の発生本数を多くして翌年の結果枝として利用する。樹齢の経過とともに結実部位が先端に移行するので、切戻しや切返しを加え一定の樹冠容積を維持する。